

流石に年少兒の故を以て暫時は躊躇の體なりしかば自分は早速裾端折り水中をジャブ／＼

日頃元氣なる男の兒を數名池の中へ連れ行きたり、之を目撃せる一同は稍々色めき來たりしかば皆々水中へ水中へと導き水鐵砲に鎗掴み盟の御船等右往左往に入亂れたる様恰も歡聲に満ちたる水戦争の如く就中高林龍子一人平然と盟の御船に乗り大勢のものに押さしめよつしよい／＼は頗る愛嬌なりき。かくて十分の時に到りしかば一同を會集場に入れ各自持參の手拭ひにて全身を拭はしめ常の装に

『菊ちやんの新遊戯』(アルコット) (三)

—— 英文學に現はれたる子供(三十二) ——

ならしめたり用意の麥茶は直に運ばれ心行くまで咽喉を濕しぬ。

幼兒は繪本觀察自由談話等の拘束をも受くる所なく全くの自由界に遊べるなりき十一時を合圖に一同圓座を作り園長より面白きお伽話をきき又の日を約し各自歸路につく。兒等の歸宅後今朝よりの有様を心に浮べ我知らず微笑を漏さざるを得ざりき是蓋し純日本的家族なる今日の保育が幼兒を歡喜せしめ延いて我等の満足となりしにはあらざるか。

其午後是一同がまゝ菊ちやんに御世辭を使つた

事！ トムといふ子はまだ當てもないのに自分の

庭の果實を寄附する約束をするし、ネッドは無賃で薪まきを供給するといふし、ナットは明日とも云は

岡 田 み つ

す菊ちやんの臺所にと冷蔵庫を作り始めるし、菊子の兄さんは時計が五時を打つと一分も遅れずに遊び室へ入つて來た。未だ茶會の始まる時刻では無かつたのだが、是非手傳はして呉れと頼むので菊ちやんも特別を以て其を許した。デミ(兄の名)は大喜びで、火を起こしたり、使歩きをしたり、熱心に御料理の樣を見物したりした。伯母様は用の暇々に來て大體の指圖をした。

「エシヤの處へいつて酸くなつた牛乳を一杯貰つて入らつしやい。御菓子にソーダを澤山入れずに、軽く出來ていゝから。」

デミは階下へ跳り去つて、忽ち濫い面をしながら、クリームを持つて歸つて來た。途中で一口舐めて見て大層酸っぱかつたので、これでは御菓子は必然食べられまいと豫言した。それで、伯母様は此期を利用して、ソーダの化學作用を、踏臺の上から、説いて聞かせた。デミはその講釋には一向耳を貸さなかつたが大要は了解したらしく、無

造作に、

「えい分つた。ソーダは酸いものを甘くするんですね、そしてシュツトと言ふと軽くなるんだ。菊ちやんあなたのためを爲る所を見せて御覽」

「その鉢に麴粉を一杯いれて、鹽を少し混ぜて」と伯母さまは引續き指圖をした。

「まあ、何でも鹽が入るのね。」と菊ちやんは鹽の入れてある箱を明けるがもう面倒になつて、かう言つた。

「鹽はね人の機嫌のよいのと同じで、何事にでも上機嫌といふ事が加はると工合が宜いのだ」と伯父様は、手に鐵槌かねづちを持つて、通り掛かりに、菊ちやんの御鍋なべを引掛ける釘を打つてやると立寄つた。

「伯父様は、御茶に招かれていらつしやらないのよ。けれども、御禮に御菓子を上げませう。私もう怒らないで爲るわ」と菊ちやんは言つた。「あなた。私の料理の組ぐみの邪魔をなすつてはいけませんよ。もしあなたがラテン語を教へてい

らつしやる時に、私が入つて行つて御説法を始めたら如何なさる」と伯母様が言ふと、

「結構だとも。來てやつて見たまへ。」と言ひ捨て

、伯父様は機嫌よく立ち去つた。

「ソーダをクリームの中へ入れて……デミの言ひ草のやうにシユッ！と言つたら麴粉の中へ混ぜ込んで、それから精ツセ／＼とかき混ぜるの……鐵鍋をよく焼いて置いて、バタを塗つて、其からその中で御菓子を揚げていらつしやい、伯母様が歸つて来るまで……ね。」

と伯母様は言ひ置いて行つてしまつた。

小さな匙がカタ／＼音を立てる。麴粉がクルリル／＼かき交ぜられて泡が立つ。菊ちやんが鐵鍋に其を垂らし込むと不思議なやうにブウッ！と膨れる。見て居るデミの口からは涎が垂れさう。併し實際は、第一回は菊ちやんがバタを塗るのを忘れたので焦げ付いてしまつたので、第二回からは上手に行つて忽ちの間に六個の小菓子が無事に皿

の上に載つた。

デミは、獨特の食卓上の配置なづかひをして、腕掛椅子に坐をしめて、

「僕は御砂糖よりも糖蜜の方が宜いな」と言ふ。

「そんなら、エシヤの處へいつて貰つていらつしやい」と菊ちやんは言ひながら、手を洗ひに浴室へ行つてしまつた。

遊び室が空虚かちになつた間に、大事變が起こつた。

犬のキツトは肉を無事に届けたのに、何の御褒美も貰へなかつたので、終日立腹してゐた、悪い犬ではないのだが、世間並に缺點もあつて、誘惑に遇つた時に必らず抵抗し終せるとも限らなかつた。今、偶然遊び室へ入つて來て見ると、好い匂がして、低いテーブルの上に御菓子が出し放しになつて居た！そこでキツトは前後の考もなく六個を只一口に頬張つた！相憎あひにくだか、幸ひだか、御菓子が未だ熱かつたのでキツトは口を火傷やけどをして思はずワン！と吠へた。菊ちやんは、それを聞

き付けて走り戻つて見ると、御皿は空虚になつて居て、犬の尾の尖端が寢臺の下へ隠れる處であつた。物も言はず、菊ちやんは、其尾を攫んで犬を曳摺り出し、その耳がバタ／＼言ふ程に、小突き廻して階下の物置へ押込めてしまつた。

兄さんに慰められ勵まされて、菊ちやんは、また一杯の麴粉を用意して、十二個の御菓子焼いた。こんどのは前のよりも上出来であつた。伯父様は二つ食べてから、こんな美味いのを口にした事がないと申遣はれるし、食堂では一同が二階のデミの御茶會を羨んだ。

全く愉快の御茶の會であつた。何故といへば、急須がたつた三度ひつくりがへつた限りで、ミルク入れも一度轉覆したばかり、それに御菓子が糖蜜の中に漂つて居て、焼バンは御料理人がビーフ・ステーキを炙いた鐵鉈を使つた爲に、どこかに牛肉の匂がした位であつたから。デミも平常の理屈ッぽさを忘れて、只御腹へ填め込む一方であつた。

菊ちやんは傍で未來の大饗宴の設計をすると、人形達は機嫌よく唯見物してゐた。

「どうです。御馳走の工合は」と伯母様は貞ちやんを抱いて上つて來た。

「實に美味い。またちきに御馳走になりに僕は來ます」とデミは力を入れて答へた。

「どうも食べすぎた様ね」

「大丈夫！僕たつた十五しか御菓子を食べませんよ。あんな少さいのに」とデミは辯解した。自分が満足するまでに随分菊ちやんを働かせたのに。

「毒にはならないでせう。美味しいんですもの」と言ふ菊ちやんの言葉には、慈母的の優しさ、主婦としての誇りとが籠つて居たので、伯母様は微笑して、

「つまり、この新遊戲は……大當りなのですわ。」と問ふた。

「僕は好き！」とデミは自分が賛成すれば事が落

着するやうな口調でいつた。

菊ちゃんやは、皿鉢を洗ひ出すつもりで小桶を抱きながら、

「こんなよい遊びはないわ。誰でも私の、やうな御料理道具を持つてゐたら可いでせうね。」と言つた。

菊ちやんの舞踏會(一)

「拜啓本日午後三時より舞踏會相催し候につき御來會下されたく候。 スミス夫人

ジョン・ブルック殿

トマス・バングス殿

ナサニエル・ブレーク殿

二伸 ナットさん胡弓を持つて來て下さいよ、

皆で舞踏ダンスをするのですから。それから皆

さん大人しくしないと御馳走を上げませ

んよ。

右の威厳いげんしい招待を受けた男兒達は、一も二もなく斷つて仕舞ひさうだつたのが、追白の終りの

文句の爲に心を動かされて、まづ、トムが

「何だか美味うまいさうなものをウンと製つてゐたよ。

好い匂がしたつけ。皆で行かうではないか」と言ふと、

「僕は舞踏會ツてもものに行つた事がないんだ。一體どうすれば宜いのだい」とナットが訊ねた。

「唯、四角張つて席に着いてさ、大人見たやうに澄し込んでね……御機嫌取りに女の子と舞踏ダンスをしてやればいいのだ。……而して有ツ丈の物を食べて終つたら急いで歸つて來るばかり。」

トムの今の説明を聞いて熟うづと考へてから、ナットは

「それなら僕にも出來さうだ」と言つた。

「僕が出席するツていふ返事を書かう。」と言つてデミは次の手紙を送つた。

「拜啓我々三名とも出席仕り候、何卒御馳走を澤山願ひ奉り候 ジョンブルック拜」

さて婦人達の方では、何しろ始めての舞踏會な

のに、もし上手に事が運んだら小數の人に饗應を
しやうといふのであるから、其心遣ひは一通では
なかつた。菊ちやんは、

「伯母様は、男兒達が亂暴をしないやうならば、
成る丈一所に御遊びと仰るから、あの人達が今
日の舞踏會を面白がるやうにしなければならな
いわ。あの人達の爲にもなるから」と言ひく
食卓を飾り、御馳走の盛つてある工合を心配さう
に眺めてゐた。

「デミさんとナットさんは大人しく爲さうだけ
ど、トムさんは惡戯をするに定まつて居る」と
ナン(菊ちやん位の少女)は御菓子を盛りながら首
を振つた。

「さうしたら追返して終ふと」菊子が決然言ふ。

「夜會なんかの時にそんな事をしちや失禮だわ。」

「そんなら、二度と招待しない事にする。」

「それなら良い。饗應に來られないで失望するで
せうね。」

「きつとさうよ。饗宴には立派な御料理をしませ
うね。眞實のスーブを作へて、チャンとスーブ
入れに入れて杓を添へて、それから七面鳥のつ
もりで小鳥を使つて、掛汁も作つてよ。……そ
れから種々の野菜もね……」

「もう三時だ……着物を着換へなくてはい」とナン
は今日のにと立派な衣裳を整へたので、早く着た
くて堪らないのであつた。

「私は御母さんだから、さう着飾らないのよ」と
菊ちやんは言つて、伯母様の長い裾を曳く裳を穿
いて肩掛を纏ひ、紅いリボンの花結びを付けた帽
子を被り、眼鏡を掛けて大きな手巾を手にして、
其で身支度が整つたのであつた。丸々肥えた、色
艶のよい中老の夫人が出來上がった。

ナンは造花の花環に薄紅色の古上靴、黄色の衿
卷に緑色の裳、塵拂の羽で作つた扇子に更に氣取
つて香氣なしの香燭までも持つた。

「私や娘だから随分御しやれをするのよ。そうし

で唱つたり舞踏をしたり御談話はなしもあなたよりかもつと澤山しなくてはね。御母さんといふものは御茶の支度をして、御行儀よくして居ればいゝのですもの」

急に烈しく戸を敲く音がしたので、スミス嬢は駆け出していつて椅子に着いて、せか／＼扇子を使つて居ると、母夫人は長椅子にツンと坐つて澄さうと努めて居た。泊りに來てゐた菊ちゃんの従妹のベスちゃんベスちゃんが女中の役で戸を開け、にこやかに、

「ちや御入りなちやい。皆ちやん。」と迎へた。

今日の催しに敬意を表して、男兒達は高い紙製のカラを付け黒の禮帽に、難多の色の手袋といふ扮装いまだちをして居た。手袋は後になつての思ひ付きだつたので一人として双手の揃つて居たのは無かつた。

「今日は夫人おくさん」とデミが太い聲で挨拶をした。その太い聲を聞けるのは骨が折れるので文句を止む

を得ず簡單にしたのである。

一同握手をして、坐に着いた。が、主客共にいかにも滑稽なのにしかも眞面目なのが、可笑しくなつて紳士連はとう／＼作法を忘れて聲を上げて轉ろげさうに笑つた。

「笑つちやいけません」とスミス夫人が困りきつて言つた。

「そう御行儀が悪いと此次から來させない事よ」とスミス嬢は、トムが一番大聲で笑つたといふので香爐にほひびんでトムを叩いた。

「可笑しくて堪りやしない。ナンさん全然化物見まろくたやうだもの」とトム君は、無作法にも思ふ通りを頓着なく言つて退けた。

「貴君あなただつてそうだわ。だげと私やそんな失禮な事は言はない。ね菊ちゃん。この人は響應に來させますまい」とナンは怒鳴つた。

「舞踏ダンスを始めた方がよいでせう。貴君、胡弓を御持參下さいましたか」とスミス夫人は、落付い

た態度を續けやうと努めて居た。

「入口に置いてあります」とナットは取りにいつた。

「御茶が先の方がよい。」と鐵面皮のトムは言ひ出した。而して御馳走を食べるとすぐに暇を告げる約束だつたとデミはしきりに目配ばせした。

「否御茶が先といふ事はありません。あなた、上手に舞踏をしなければ御馳走は貰へないのでですよ。え、一口だつて食べさせませんか」と夫人が厳しく言ひ渡したので、さすがの亂暴な御客連もこの夫人は馬鹿に出来ぬと悟つて、俄に丁重懃懃になつた。

「私がバンク氏と組になつてポルカを御教へしませう。此方は少しも御存しなくて見つともないから」と夫人は言ひ添へて窘めるやうにトムを見遣つたので、トムは急に眞面目になつた。

ナットが胡弓を弾き出した。舞踏は二人組が二つで、兎も角も正直に行はれた。婦人連は、好きな

ので、上手に踊つたが紳士達は御馳走に與る手段だからとの手前勝手な理由で、我慢してやつてゐた。誰も彼も息が切れて來たので皆休息した。特にスミス夫人は、氣の毒にも裾長の衣裳に幾度も躓いたので、ひどく弱つて見えた。小さな女中が糖蜜水を持つて廻つたが、茶碗があまり小さいので、一人の客は九杯も飲んだ。その姓名だけは態と省くが、此客人はこの飲料に酔ひでもしたか、九杯目には茶碗ごと口へ入れて、満坐の中で咽を詰まらせるやうな騒ぎを演じた。

「あなた私の娘にピアノを弾いて唱つて呉れと頼まなくてはいけない」と菊ちゃんは、兄さんに指圖をした。

「御嬢さん歌を一つ御願ひ申ます」と従順な客は言つたが、ピアノは何處にあるのだらうと心に怪んでゐた。

スミス嬢は、室の片隅にある机の處へスル／＼と歩いて行つて、蓋をはね退けて、その前に坐つ

て獨りで伴奏しながら唱ひ出した。その弾き方が烈しいので、古机がガタ／＼音を立てる程であつた。一曲了つた處が、御客の喝采が非常なので、令嬢は次ぎ／＼知つて居る限りの子供唄をやり出した。竟には御客が困つて、もう澤山ですといふ素振りをして見せた。スミス夫人は、娘を賞められた嬉しさに、慇懃に、

「さあ御茶に致しませう。靜に御着席下さい。手荒くしては駄目よ。」と言つた。(續)

雜錄

○大會の盛況

全國幼稚園關係者大會は、事の頗る氣運に適合せると、會員諸君の熱心なる準備とによつて、計畫著々進捗し、會期三日間は最も盛觀を呈すべき景況で有ます。會員として出席を申込まれたる數は、本號締切までに既に四百餘名に達し、内百數十名は東京、他は京都、大阪を始め全國諸縣に亘り、北海道、沖縄、朝鮮、滿洲等の遠きより、態々來會せらるる向夥くありません。而して其の一人々々は孰れも幼稚園教育のために一騎當千の熱心家でありまして、或は經驗豊富なる熟練家もあるべく、或は識見深遠な

る研究家もあるべく、或は斯道の爲に其の激測たる若き活力を傾倒して惜まざる新進家もあるべく、之等の人々一堂に會して互に親睦を謀り又種々重要問題に就て相議す、其の盛況期して思ふべきであります。本誌の發行は恰かも其の會期中であると思ひますが、時炎暑酷烈の候、來會諸君全體の健康を祈らざるを得ません。

○幼兒教育夏期講習會

大會に引つゞいて催せらるべき夏期講習會も例年以上に盛會なるべき模様であります。殊に本年の講習科目は、幼稚園教育に最も直接なもののみを撰び、それ／＼専門の講師を煩はしたのでありますから、其の結果の有益なるを疑はないのであります。就中二階堂講師の體育の最新原理に基く遊戲法と、三田谷講師の教育の新方面の研究を幼兒に適用せられたる講演とは、我國幼稚園教育に新らしき一面を提供せらるゝものでありまして、會員諸君の特に專意講習せらるゝことを希望するのであります。

○幼兒用新唱歌集の發刊

萬原幽氏作歌、小松玉巖、梁田眞雨氏作曲の『大正幼年唱歌』第一巻及第二巻は目黒書店より發刊せられました。此の方面の缺乏を補ふ上に於て、幼稚園教育の爲に賀すべきことであります。